

★2018年10月18日、ライン・フリートリヒ・ヴィルヘルム・ボン大学創立200周年を記念するアカデミックイヤー開始に際してのフランク=ヴァルター・シュタインマイヤー独大統領の式辞

－後半部全訳－

林フーゼル美佳子（ドイツ・ボン在住、翻訳家）

学問の自由が支配者の恩寵によってのみ許容される場合、それはまた認められなくなることもあるという教訓は、今日でも時に思い起こす必要があります。当時すでに正しかったことは、今日でもなお有効です。学問から自由を奪う者、「専門家」を侮辱し、反学問を1つの様式にまで高める者は、「火遊び」をしており、未来の成功を危険にさらします。学問の自由、それは決して借りものであってはなりません！それは保証されなければならないのです！

当時はそれに加えて、プロイセンのプロテスタント王フリートリヒ・ヴィルヘルム3世にちなんで名づけられたボン大学〔訳注：ボン大学の正式名称は、ライン・フリートリヒ・ヴィルヘルム大学ボン〕が創立されてから最初の数十年間、明確な文化闘争的植民地支配的な傾向を持っていたという事実があります。カトリック系神学部を除き、ほとんどの講座がプロイセンのプロテスタントで占められていました。カトリックの牙城であるライン川地域におけるそうした活動は、ほとんど布教に近いものでありました。中には自分がライン川地域の自由に対するプロイセン支配の守護者と理解している者もいました。

このような対立項、このような対極化と多元性を含む多層的な矛盾、こうしたことは、数十年の長きにわたる痛みを伴う文化闘争と統合プロセスの中で和解していかざるを得ませんでした。このため、今日私たちがこうした対立に思いを馳せる場合、宗派争いの痛み、そして自由・統一・平等のない痛みにも思いを馳せることになります。我が国において今日、帰属やアイデンティティの問題について論争するとき、私たちは、すでに克服した分裂やすでに獲得した自由の数々を思い起こすことによって、ここボンでも、少しの希望と展望を得ることができますし、また、そうあるべきです。

創立100周年を記念する大きな式典は、またもや中止になりました。戦争のために、創立100周年記念式典は1年遅れの1919年に行われました。誕生したばかりの民主主義共和国〔訳注：1918年11月9日にドイツ帝国が倒され、ドイツ史上初の民主主義共和国の樹立が宣言された。いわゆるワイマール共和国〕における当時の雰囲気は、せいぜいささやかな希望がある程度でした。100周年記念式典において、当時の学長エルンスト・ツィテルマンはこう言いました。「戦争は、私たち国民をこれまで想像もつかなかったような巨大な課題を突き付けました。平和は私たちにさらに難しい課題を与えることになるでしょう。」同年、ボン大学はトーマス・マン〔訳注：ノーベル文学賞受賞作家、1875～1955年〕に名誉博士号を授与することを決定しました。ちなみに、彼の民主主義に至る道のりは、祖国の

それと同じように紆余曲折しています。1914年の第一次世界大戦開戦時、トーマス・マンはまだ次のようなことを書いていました。「外来の忌むべきスローガン『民主主義』を捨てよ！西側の機械的・民主主義的国家は、我が国では永遠に市民権を得ることはない。」これは、後に彼が家族とともにナチスから逃れ、西側の自由民主主義国であるアメリカへ亡命した際、彼自身が自分で驚いたという文です。そのことを私はつい最近になって、パシフィックパリセイズ〔訳注：カリフォルニア州ロスアンゼルス西部の街〕にあるトーマス・マンの「亡命先の白い家」で思い出す機会がありました。そこで彼はフランクリン・D・ルーズベルト米大統領（当時）に熱狂し、自衛する自由主義的民主主義のために戦う情熱的な活動家に変貌したのです。

その間、ドイツの国とともにボン大学も、民主主義に背を向けていました。ナチス党は、ボン大学学生代表会自由選挙で多数派になることは一度もありませんでしたが、1932年にはすでに票の3分の1を獲得していました。ドイツ全国でそうであったように、ボン大学もナチス政権の全体主義的な監視下に置かれ、ユダヤ人教授や政治的に好ましくない人員は解雇されました。プロテスタント系神学者カール・バートは、ヒトラー総統への忠誠の誓いを拒んだために教授職を失いました。多くの人たちが亡命しました。またある者は、哲学者のパウル・ルートヴィヒ・ランツベルクやヨハネス・マリア・フェルヴァイエンのように刑務所やナチスの収容所で命を落としました。我が国の世紀の作家にしてノーベル賞受賞者であるトーマス・マンに対しては、1936年に恥ずかしくなるほど狭量な行政行為によって名誉博士号が剥奪されました。ちなみに、この手続きに関しては、戦後、誰も責任を取ることがありませんでした。多くの地位ある人々はみな、その従順さでもって不正による支配を可能にしたにもかかわらず、1945年以降、自分たちが無罪であると思い込んでいたのです。そういうわけなので、1946年にトーマス・マンの名誉博士号をこっそりと何の反省もなく回復させることもまた簡単にできたのです。それに対して、誇り高い民主主義者に成長していたトーマス・マンは、表彰を改めて受け取ることで真の偉大さを示したのです。

民主主義への道のりは、ボン大学にとっても、我が国にとっても、長く苦しいもので、自身の精神的な伝統を伴い数回の政治的決起があったものの、最終的に連合国がヒトラー・ドイツに勝利し、強制と占領によって民主主義国家樹立を完成することになったのです。ちなみに、ボン大学には、イギリスとのパートナーシップが大きな影響を与え続けました。何はともあれ、当時から今日に至るまで、オックスフォード大学との活発な交流が続いています。

今日、私たちがこうした過去200年を、この曲がりくねった民主主義への道のりとあらゆる寄り道を振り返るとき、次のような疑問が残ります。そもそも、大学は今日何を為すべきなのか？私たちは大学に何を期待していいのか？そして、私たちは何を望んでいるのか？

もし私自身が何かを望んでもよいのでしたら、大学が、学問に注力するにしても、常に民主主義の場であること、これに限ります。

それは具体的にどういうことでしょうか？まずは、民主主義の場であるためには、大学は何よりも自由の場でなければならないと私は信じています！

というのは、この時代に残念ながらまた改めて思い起こさずにはいられないのですが、民主主義というものは、自由な民主主義または自由でない民主主義があるわけではなく、むしろ、民主主義は自由であるか、またはそうでなければ民主主義ではないということが言えるからです。「自由でない民主主義」は一種の自己矛盾です。民主主義は選挙を前提としますが、それだけで成り立つわけではありません。それは多数を正当と認めますが、あくまでも法と憲法の範囲内でのことです。つまり、近頃ヨーロッパの一部で主張されるようになっている考え方とは違い、民主主義とは、法治主義や少数派保護なしには成り立たず、人権と市民の自由なしには滅びてしまうものなのです。そして、民主主義は、精神の自由と切り離すことはできません！

大学とは、民主主義における自由な空間と保護すべき権利の真意を飽くことなく追求する場です。また、言っているいいことと悪いことを区別する言論の自由の基準や、新しい思想の限界や利点について議論する場です。そうです、大学は自由な空間を必要としますが、その大学でこそ、自由な空間がそもそも議論され、定義されるのです！真実と知識の学術的探究は、私たちを繰り返すそのような議論に引き込みます。それは挑戦的であり、往々にして不快です。たとえば、ここ数年で、殊にアメリカで、大学をきれいな言語と精神的平穏が支配する生態系に発展させていく傾向がありました。行き過ぎた思いやりと「トリガー警告ⁱ」のために、シェイクスピアまで履修課程から消えてしまうところもあります。そういうことは、私は間違っていると思います。お互いに敬意をもって付き合うということは、決して知的挑戦から保護するというものではありませんし、ましてや大学でそのようなことはもってのほかです！

逆に私は、よく非難の対象となっている「ポリティカルコレクトネス」をすでに戦いのスローガンに選んでしまっている人たちにお伝えしたい。「ポリティカルコレクトネス」とは、必ずしも臆病さや言語警察を意味するものではなく、まず第一に、苦勞して獲得した慰懃さと歴史的感受性の表現です。ですから、私は、これを輕率に失くしてしまうべきではないと考えます。

民主主義を学ぶ、これは、自由と責任を持って初めて可能となります。今日のデジタル知識社会で、間もなく1学年の半分以上が大学へ進学するようになれば、大学で教鞭を取る方々は、民主主義の未来に対する大きな責任を負います。過去数十年間の大学改革を経て、大学での勉強は今日、個人的な探検旅行というよりは、オールインクルーシブのクルージングに似ていると言う人がいます。これの意味することはおそらく、社会における将来の

地位を探るために必要な経験をしない旅ということでしょう。

これは、私はいささか大げさだと思います。しかしながら、ボローニャ・プロセスⁱⁱの一環として学士（バachelor）と修士（マスター）の導入〔訳注：ドイツではそれ以前には修士しかなかった〕やモジュールや成績評価の変更を伴うあらゆる構造改革と業績向上措置が講じられましたが、そこで重要なことは、履修学科の選択の自由、議論の自由、自分の専門学科の境界も大学の境界または国境を超えた交流の自由です。こうした自由は、親愛なる大学教授・講師の皆さん、守り、実践していくべきです。私たちが、シラー〔訳注：フリードリヒ・フォン・シラー、1759～1805年、詩人、歴史学者、劇作家、思想家〕がイエーナ大学の就任講義で表現したように、「パンの知識人（食べるために知的職業についている人）」というばかりでなく、「哲学的な頭脳」でありたいのであれば、そして、シラーなら今日きっと付け加えると思いますが、民主的な頭脳でありたいのであれば、自由を守り、実践していくべきなのです。

皆さんは、教授会や学部審議会やそれぞれの講座において大きな責任を負っています。もちろん皆さんは、そこで安定的な物質的基礎、良好な金銭的土台を要求する権利がありますし、それを実際に要求しなければなりません。私たち皆が望むような国際競争力や真の最先端研究、さらにまた精神的な独立性と創造性、こうしたものすべてが適正な装備を必要とします。まさにこの点において、国が責任を負うのです。ですから、そのことを繰り返し国に思い起こさせるのはよいことです。しかし、我が国はここで恥じることなどありません。特に、過去15年にわたって学術研究に投資し、その幅広さと優秀さにおいて再び学術のトップクラスに返り咲いたのですから、私は、我が国が将来もこうした要求レベルに対処して行けるという希望を持っております。

親愛なる大学教授・講師の皆さん、あなた方が、ご自身の演習・講義・セミナーなどを、社会と民主主義に対する学問の責任を果たす機会でもあると考えてくださることを願っています。そのためには、大学において、談話や議論を促進する雰囲気が必要であることは疑いありません。そしてまた、非常に質の高い教育、討論を誘う教育が必要です。こうした要求が、ここボン大学において、今日すでに皆さんの行動指針となっていることと思います。しかしながら、それだけでは十分ではないと私は考えます。私たちが21世紀の大学教育に何を求めるのかについて、根本的な議論をし、定義する必要があります。今日、大学での勉強は何のために役立つべきのか？それは、将来、思考と行動におけるどのような能力を伝授すべきなのか？また、これらの要求すべてに対応するために、学問は何をなさなければならないのか？優秀な学者が同時に優秀な教師でもあることを偶然に任せることができるのか？一部の人が求め、また多くのアメリカの研究機関ですでに実施されているように、教育のための「能力養成」において新しい方法を見つける必要があるのか？こうした問いの答えを見つけていただけるよう、私は今日皆さんを鼓舞したいと思います！

学問の独立性、精神の自由、その中にヨーロッパの啓蒙思想の遺産が受け継がれています。それは、フンボルト思想の理想の基礎です。この理想は、2世紀の間、世界中の大学文化の発展に影響を与えたばかりかそれを形成したとも言えます。当然ですが、学術的活動や研究の条件はこの2世紀の間に変化してきました。大学の幅広い層への開放—お気づきでしょうか、私は「マス大学」という言葉を避けています—、および大学外の膨大な研究キャパシティの創設、ボローニャ・プロセスという主なキーワードを3つ挙げるにとどめますが、そうしたことによって、学術的インフラが著しく変化してきました。

しかし、変化が今日の私のテーマというわけではありません。むしろ、変わらないもの、変わってはいけないものが大切なのです。それは、国による影響力の行使や制限からの自由という意味での学術研究の自由です。このことは、今日の我が国の憲法である基本法第5条第3項が保証しています。しかも、憲法による保護範囲の制限なしにです。この保証があることで、その自由は、贈り物でも自己目的でもないことになります。そこにはむしろ、国による基準からの独立性と自由こそが、学術研究の創造性を開花させ、文明の進歩のための前提条件を生み出すという、現代的で未来志向の社会の利益、そう、希望すら込められているのです。

国からの独立性は保証されています。他のことからの独立性は、学問自体が確保しなければなりません。そして、それは、私が判断できる限りでは、成功しています。個々の研究分野における大規模な第三者融資の影響について時に質問をされることがあっても、誰も文句を言うべきではありません。そのような質問は、回答可能です。重要なのは、大学や研究機関が、独立性の条件を意識し、それをどの方向に対しても防衛することだけです。

自由で独立した学問があつて初めて私たちの現代的な社会が可能になるのです。強力な学問なしには、我が国は生き残ることができないでしょう。学問があつて初めて、我が国は国際的な学術交流の中でパートナーとなることができるのです。そうした交流は私たちにとって不可欠なものです。学問があつて初めて、イノベーションや未来の世代のための展望の基礎が打ち立てられるのです。学術的自由と、責任感のある研究者精神が組み合わさることで初めて、自由行動の余地が生み出され、その中で社会は自らの存続を確保できるのです。

そのために私たちは大きな議論、そしてまた論争も必要としています。しかし、その際、我が国におけるこうした大きな議論が、複雑性に尻込みして、簡単な回答を出すための競争になり果てては行けません！

そのために私たちは皆さんが必要なのです。なぜなら私たちはさまざまなことに耐えられる回答を必要としているからです。また、そうした回答が生み出されるプロセスが特に必要です。表面的な政治的またはその他の利益に左右されないことによって得られる信頼性のあるプロセスです。関係者たちが「真理」の創造に貢献するという自己理解とやる気

を持って参加する、根拠と事実に基づいたプロセスです。今の時代は、「感じた真実」と、政治的、経済的、そしてまた学術的「エスタブリッシュメント」に対するときには壊滅的ともいえる批判が幅を利かせており、学問が疑問視され受容されない傾向にあります。だからこそ、学問がどの程度尊重され、その成果がどの程度受容されるかは、個々の成果よりもむしろそのプロセスの信頼性が決め手となるのです。

それには、私たちが疑問から逃げないことも重要です。学術研究が私たちの想像力の限界点、あるいはそれを越えたところへ進む場合、特に根源的な倫理的問題を投げかけるようなところ、たとえば遺伝子工学や人工知能などの分野、不安や拒否反応を呼び起こすような分野では、社会的な疑問を無視するのではなく、それに回答する努力をしなければなりません。

ドイツ人は基本的に進歩を拒むとか、技術を怖がるといった、時折ばら撒かれる疑念を私は信じません。もしそれが当てはまるのであれば、私たちの研究環境の現実や我が国の現代性をほとんど説明できないではありませんか！それでも、私はドイツ国民に、未解決の問題に答えられるということ、リスクは変えられるということ、特に、未来が、変化がたくさんあるにせよ、自分たちの力で作っていけるという希望をもう少し持ってほしいと、少なくとも願っています！

最後になりますが、大学がアカデミアの中での中心的役割の他に、民主主義の場である、またそうでなければならないのであれば、その責任の範囲は、実験室や講堂の中にとどまりません。私は、大学で働く方々、大学で考えることと議論することを学ぶ方々、そしてまた、大学から社会へ影響を及ぼす方々が自信を持った人間であり、信念を持った民主主義者であること、そういった方々のいる大学を望みます。私たちは、研究や高等教育ばかりでなく、現代の公の議論においても学問から賢明な知恵を与えてくれる方々を必要としています。学問は、民主主義が付与するその場を満たさなくてはなりません。

これで終わりにしたいと思いますが、皆さんは、大学が外に向かって活動する際に、民主主義と自由の中での研究や教育の価値を伝えるための機会を見つけることができるかもしれません。マクロ的には社会全体を、ミクロ的には大学を同じように動かす大きな問題、影響力のある議論、交渉プロセスに参加するための機会を見つけることができるかもしれません。

ボン大学は今日200年の歴史を誇りをもって振り返ります。けれども、特にボン大学がこの200年でどこまで進歩したのか、ボン市の評価や我が国のイノベーション能力と富に今日どのような貢献をしているか、こうしたことに誇りを持っていいでしょう。

大学が最も貢献できるのは、自信に満ちた、啓蒙的かつ自由主義的民主主義のためです。なぜなら民主主義においてのみ、学術研究の自由が恒常的に保証されるからです。条件が変化していく中でも、繰り返し改めてそうした保証を勝ち取っていけること、それを皆さ

んと我が国に願っています。創立200周年、心よりお祝い申し上げます。

ⁱ トリガー警告：2000年代から英語圏の大学で政治活動家たちが、宗教的文化的少数派、および性的指向やその他の少数派を傷つける可能性のある内容が言論の場からなくすため、少なくともそのような危険のある内容に「トリガー警告」を付けるように尽力している。

ⁱⁱ ボローニャ・プロセス：高等教育における学位認定の質と水準を国が違っても同レベルのものとして扱うことができるように整備するのを目的として、ヨーロッパ諸国の間で実施された一連の行政会合および合意。